
行く先に

楠 海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
行く先に

【Nコード】
N5009Z

【作者名】
楠海

【あらすじ】
人間が祝う聖夜はあまり彼らに関係がないのかもしれない。

一日中降り続いた雪はようやく降り止んだ。濃灰色に淀んでいた空も透き通った漆黒に戻っている。

夜の空が黒いのは、青空の向こうに広がる世界の色を映しているから。実はあの星々も、煌々と照る月も、もっと言うと太陽だって向こうの世界のものなのだ。

そう教えてもらったことを思い出し、ステラは改めて夜空を見上げた。

まさか、と思った。今でも実感できない。

「たとえ目の前にあるとしても、簡単に行くことができないあれは確かに異世界なのだよ」

ステラの心中を察したように、大木の根本に寝そべった母が低く呟いた。

「なんで母さんは私が考えてることがわかるの？」

「夜空を見上げてぼんやりと口を開けっ放しにしているからさ」

う、と呻いて口元を押さえるステラを見、母キセノスは喉の奥で笑う。

月に白々と照らされた雪原はまだ風に乱されてもいない。白銀の大地は月光も星灯も余さず受け止めて返し、それでも夜空はあくまでも闇色を保ち続けている。

森の中にぽっかりと開いた空き地に大木が一本。その根本からステラが立つここまで、彼女自身が雪を漕いで来た跡が一筋ついていた。

一面の白に色をつけるのはその跡と、彼女と樹が落とす黒い影。そこにキセノスの影が加わる。

「晴れたな」

一言呟き、それきり何も言わないキセノスにステラはちらりと目を向ける。

「いつもみたいに、いい夜だ、って言わないの？」

「……確かにいい夜だ。だが今日は人間の祭の日」

溜息とともに真白な霧が漂う。

この森は人里に近くはないが、冬の澄んだ空気を渡る楽の音は届く。本当に微かな、鈴の音、笛の音。

森が奏でる音ではない音だが、ステラはこの音が嫌いではない。演奏するニンゲンも嫌いではない。けれど同じ笛の音といえど、狩の角笛の音は好かない。食べるためならともかく、彼らは遊びで森に生きるものたちを追い回す。でもやっぱり根本的には嫌いになれない。

そう言つと皆に変な目で見られた。母もニンゲンは嫌いなようだった。

「楽の音、綺麗だよ」

「森の声の方がよほど美しいわ」

今日も素気なく返された。

「仲間内で騒ぎおつて、うるさくて堪らん」

忌ま忌ましげに唸るキセノスの尖った耳には、ステラよりもよく楽の音が聞こえているのだろう。その耳が苛立たしげにぴくりと動く。

それを、そして全身を覆っているのは灰色の毛並みで、月光の下では銀の光を帯びて雪原によく映えていた。

「うらやましいなあ、綺麗な毛並みで」

「ステラも遜色ないが」

「でも私のは光らないよ」

不満げな呟きに、キセノスは琥珀の瞳でステラをまじまじと見つめた。

「良いではないか。夜より深い闇の色だ」

「目だって母さんみたいな綺麗な黄色じゃないし」

「海の色も私は好きだぞ」

海、とステラは口にのぼせる。

塩辛い大きな湖のようなものと、遠方から来たアオバズクが言っていたが、ステラ自身は見たことはない。川よりも湖よりも、深い青だそうだ。

空くらい広いという「海」。どれだけたくさんの水があるのだろう。どんなに深い青なのだろう。

「こんなに広い湖なんて想像できないよ」

そう言って夜空を仰いだステラは、一瞬月が陰るのを見た。雪の上に伏せていたキセノスが素早く立ち上がり、耳をぴんと立てる。

海の瞳と琥珀の瞳が刹那交わされ、周囲を窺う。

何かが来た

瞬時に全身を緊張させたステラは、自身の足跡を辿った先に大木を見上げ、その梢に目を留めた。

ニンゲンがいた。

否、ただのニンゲンではなく、大きな白い翼を背に負っていた。

その奇妙なニンゲンは大木の一際大きな枝に立ち、幹を撫でていたがやがてこちらを見た。一瞥ではなくじっと観察している。

そして翼を広げ、枝を蹴った。

思わず息を呑むステラの前で、大きく二、三度羽ばたいて雪の上に降りる。煽られた粉雪が舞った。

男のようだった。他のニンゲンとは違い、ひだがたくさんついたゆつたりと白い服を着ていた。その男がこちらに足を踏み出す。瞬間、獰猛な唸り声が傍らから上がった。

ステラの前に仁王立ちになったキセノスは、低い唸りの間に言葉を挟んだ。

「寄るな」

男は無言で更に近づいてくる。その腰に幅広の剣をはいているのが見えた。雪に足跡はついていない。

じつと距離を測るキセノスが、ある一点で体を低くした。すると男は立ち止まる。そしてステラを凝視した。

キセノスと同じように攻撃体勢を整えたステラは警戒を眼差しに

乗せ、見つめ返す。

男の目は春の空のような淡い水色だった。

「こんばんは」

仄かな微笑を乗せた声は透き通るテノール。

「だれ」

皆まで言わせず、覚えてたての人語で切り返す。

そのたどたどしい発音を聞いているのか男は目を細めた。

「無理に人語で話さなくてもいい」

「娘に構うな」

「娘？彼女がお前の？戯言を言うな」

キセノスが放った言葉はニンゲンのものではなく、しかし男は冷ややかに応じた。

「貴方、何？」

再び同じ問を、今度は人語でなくキセノスと同じ言語でぶつける。

男はいかにも気が乗らない様子で明後日を向いて答えた。

「天使」

「てん、し？」

「大天使が一人、ガブリエル」

「がぶリエル」

耳慣れない単語を口にのぼせたステラは、その名前を以前聞いたことを思い出した。

「ニンゲンの神様のお使い？ならなんでここににいるの？ニンゲンがお祭りをしてるのは街だよ。ここじゃない」

街の方角を示したステラに、ガブリエルは首を横に振った。先刻立っていたあの樹を指し示す。

「私があるのは街じゃない。あの樹だ」

「今晚はあの樹の下で寝るつもりなんだけど」

「伐りはしない」

「じゃあどうするの」

一呼吸おき、ガブリエルはぼそりと言った。

「……飾る、らしい」

「らしい？」

「飾れと言われたんだ」

「なんで？」

「……主の誕生日だから、だそうだ」

「飾るだけなら別にいいよね？」

キセノスを振り返ると不機嫌そうな半眼になっていた。

「寝場所をちゃらちゃらと飾らせるのか？」

「飾ろうが飾るまいがお前には大して違いが分からんだろうよ」

「きらきらして目障りだ」

「こんなに葉が茂っていれば根本にはそう届かぬさ」

どうやらキセノスとガブリエルは折り合いが悪いらしい。

「多少きらきらしても寝られるけど」

「ステラ、お前はどっちの味方だ！」

「だって平気なものは平気なんだもん」

最後に一声唸り、しかしキセノスは毛を逆立てながらも引き下がった。

「……許す」

「どうやって飾るの？」

答えるガブリエルは面倒臭そうな表情を隠そうともしない。

「雪と氷と光　星灯と月灯を弄るだけだ」

話しながらガブリエルはついと手を上げた。女の手のように白い織手が、空の光を掬^{から}め捕るようにゆると動く。

差し出された彼の手を見たステラは小さく声を上げた。光の糸が絡み付いている。

「何これ、蜘蛛の糸？それとも本当に光でできた糸なの？今のどうやってやったの？」

目をきらきらと輝かせ、矢継ぎ早に尋ねるステラからガブリエルは心持ち身を引いた。

「……先程から質問ばかりだな」

「だって天使に初めて会ったし、やることも不思議だし。ねえ、これって私にも触れる？」

無言で差し出された系を取り歓声を上げる。滑らかで非常に軽く、ひんやりと冷たい系を弄ぶ間にも、ガブリエルはうつすらと燐光を帯びた糸を次々に紡ぐ。

彼の手は器用に動き、見ている内に繊細な透かしが入った布を形作る。緻密な作業だが早い。ガブリエルは、布がステラの背丈を越えるくらいの大きさになった頃合いで一度それを置き、再び空に手を伸ばす。

雪の上に置かれた布は、月光を増幅させて輝いていた。

「これが一枚？作るの早いね」

「それはまあ、ミカエルよりは器用だからな」

「みかえる？」

「天使軍の将にして大天使が一人。武闘派だけあつて不器用窮まりない。そもそもミカエルがこんなことを言い出すから大天使の一人たるこの私がわざわざ下界に降りてもみの木を飾ることになっているのだ。奴め言い出したくせに警備がなんだかんだと言って天界に残りおつて」

ぶつぶつと呟き続けるガブリエルの手はそれでも止まらない。むしろ作業は速くなっている。無造作に投げ置かれた布は互いに重なることなく新雪に着地する。

「これはどうするの？」

「樹に掛ける」

「掛けてもいい？」

弾んだ声でステラが言うと、ガブリエルは逡巡するように眉をひそめた。

「構わないが、樹に登れるのか？」

「登れるよ。栗鼠^{りす}の兄弟に教わったから」

答えながら布を二三枚胴体に巻き付ける。解けないよう端を挟み込み、軽々と幹に取り付いて登っていった。

「親切な栗鼠がいて良かったな、お前には木登りは教えられまい」
「樹に登らずとも足があれば生きていける」

口の端を僅かに歪めてガブリエルが言うと、キセノスはステラを見つめながら端的に答えた。ステラは枝を器用に渡り歩き、雪を払い落として布を掛けていく。

それを見上げたガブリエルは、雪に広げた何枚もの布を片腕に掛けて飛んだ。舞い上がる白い霧が刹那キセノスの視界を奪う。煙幕を振り払い見ていると、ガブリエルが樹上で布をステラに渡し、更に布を織り始める。

キセノスは溜息をついた。

二人並んだステラとガブリエルは、ガブリエルの翼を抜きにすれば同じ体の作りをしている。

そろそろステラを人間に帰す頃合いなのだろうか。

十七年。何度もこの問を繰り返した。そして今夜もまた同じ問が頭をもたげる。

ガブリエルの指示に従い、彼女は今度は樹上の雪を取り雪玉をせつせと作っている。それを受け取った天使は光る糸をくくると巻き付け、仕上げに一本別の糸を取り付けて枝に吊した。見つめるステラの目は真ん丸だ。

ステラの手はキセノスの前足とは違う。五本の指で器用にものを扱える。そもそも生きるべき場所が根本的に違うから、体の作りも違うのだ。それは彼女を見る度に思い知らされることだけだ。

ガブリエルと何やら話していたステラは、身軽に樹から下り雪を掻き分けながら近づいてきた。

「氷が欲しいんだって。池に行ってくるね」

「そこまで手伝わなくてもいい」

「大丈夫、すぐに戻るから」

返事も聞かず、雪原を横切って森に入ってしまった。流した黒髪が雪に映えていた。

羽ばたきの音が聞こえた。次いで軽い着地音。

「わざわざ行かせずとも池の場所は知っているだろう」

「お前と一対一で話したかった」

氷が入り用なのも嘘ではないが、とうそぶくガブリエルを見上げる。水色の瞳はこちらを見ない。

けれど言葉はこちらを向いていた。

「まさかお前が人間の子供を育てているとはな」

「……私自身も驚いているさ」

キセノスは鼻面にしわを寄せた。

「戯れか？」

「違う」

「だろうな。たどたどしいながら人語も話す。毛皮を身につけ、二本足で歩き、手も器用だ。どうやって教えた」

「人間を見せたんだ」

ぼつりとこぼれた呟きに、ガブリエルは初めてキセノスを見た。

キセノスは、腰を下ろしたまま俯いていた。

「……私自身の手で教えてやれなかった」

ガブリエルは呆れたように溜息をつく。それをキセノスは睨んだ。
「彼女は人間の子供で私は狼、そもそも種族が違うことくらいわかってる！だがなガブリエル、」

「それでも大切に思っているのだろう？」

言葉を引き取られたキセノスは口を閉じた。琥珀の瞳と薄水の瞳がかちあう。

「彼女も随分とお前を信賴しているようだ。親を慕う子そのものに」
見開かれた琥珀の目がややあつてついと伏せられた。

「……捨てられた嬰兒を愛らしいと思ってしまったのだ。今となつては愛しいとすら」

「……そうか」

「なあ、天使よ」

ガブリエルを見上げた琥珀の瞳は不安げに揺れていた。

「お前が主と呼ぶモノは、ステラを守ってくれるのか」

「もちろんだ」

「キセノスの……異種族の娘でもか？」

「……それでも彼女は人の子だ」

キセノスは何も言わずにただ目を閉じた。

もみの木の飾りがきらきらと反射していた光が、瞼の裏にちらついていた。星そのものを飾ったようだった。

彼女の名はステラ 星のような娘。

小さいながらきらきらと輝くその姿は、化け物である自分には眩しくて、だからこそ魅せられた。

手放したくない。いつまでも傍に置いて守っていたい。

けれど彼女の幸せを願うからこそ

「汝らの行く先に絶えず光のあらんことを願う」

もみの木を見つめてガブリエルが呟いた。キセノスは訝しげに小首を傾げ、そして苦笑する。

「ステラはともかく、異種族の私まで祝福してどうする」

「主がしないからこそ一介の天使である私が祝福する」

堅苦しい言葉を崩さないガブリエルに、キセノスは僅かに表情を緩めた。

夜空を見上げると、星の海が広がっていた。

茂ったまま枯れている草を、ステラは塊でむしり取った。それを地面の上に広げ、小石を掴んで氷が張った池の水面に向き直る。

岸に近いところの氷の一部を叩き割り、その割れ目に手を差し入れてゆつくりと氷を持ち上げる。一瞬大きな板のまま持ち上がりかけた氷は、自重で割れて再び池に戻る。ステラの手元には彼女の顔くらいの大きさで残った。

それを枯れ草の上に置き、もう一度同じことを繰り返す。二枚目を一枚目に重ねたところで、ステラはふと顔を上げて木立を見つめた。

ややあつて、すっかり葉を落とした木々の間から人影が現れた。

馬を連れている。シルエツトは普通の人間で、嗅覚も特に異常は感知しない。ただの人間のようなのだ。

馬を引いてこちらに歩きかけたその人間は、ステラを見て立ち止まった。

「……森の子？」

若い男の声と一緒に白い霧が立ち上る。

確かにこの森の近隣に住む人間に「森の子」と呼ばれることはある。ステラをそう呼ぶ人間は危害を加えようとはしない。

「こんばんは」

「え、あ、こんばんは」

人語で話しかけると、青年は慌てたように口ごもった。そして心配そうに言葉をかけてくる。

「こんな夜更けに何を？」

無言で氷を見せるとわずかばかり眉をひそめステラと目を合わせた。

「家までお送りしよう、一人では危ない」

「家、ここ」

自分にとつては至極当たり前なことを言うと、青年は初めて気が付いたように何度かまばたきした。

「……そうだったな」

「森の子」と呼んでおきながら妙な反応をする人間である。

「なぜ、ここ、いる？」

こちらから聞いてみると、青年は苦笑した。

「宴で酔いつぶされそうになって逃げてきたのだ」

青年が馬の轡を取り池に歩み寄ると、微かに酒の匂いがした。

水際に近寄ろうとした栗毛の馬は、ステラを避けて大きく回り込み離れた水面に口をつけた。その間も警戒するように耳がこちらを向いている。近付くと筋肉が緊張するのが感じられた。

逃げ腰な馬の前で立ち止まり、自分の言葉で話しかける。

「襲うつつもりはないよ、怯えなくてもいい」

言葉とともに流れる凍った息を受けた馬は、ややあつて力を抜き鼻を鳴らした。撫でられても動じていない。

嬉しそうに笑ったステラは氷を包んだ枯れ草の塊を持ち上げ、森の奥に足を向けた。その背中に声がぶつかった。

「お嬢さん」

立ち止まり、完全に振り返る前に背中に何か掛けられた。

「そんな毛皮一枚では寒いだろう。来て行きなさい」

ずしりとしたそれは、どうやら彼が着ていた外套らしい。それからも酒の匂いが少しばかりする。

毛皮一枚だけでも寒いわけではない。けれど外套はもっと温かかった。体の前で外套を掻き合わせ、表情を綻ばせたステラは青年を振り仰いだ。

「ありがとう」

それを受け、目を丸くした青年は照れくさそうに笑顔を返した。そのまま歩き出そうとしたステラは、ふと思い直し彼に再び向き直る。

「森の子、違う。ステラ」

「ステラ……星か。ではステラ、メリークリスマス」

挨拶、だろうか。それなら返さねばなるまい。

「めりーくりすます」

彼は笑ってくれた。どうやら正解らしいから、今度こそステラは帰ることにした。

青年の体温が移った外套は、夜風にも冷めなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5009z/>

行く先に

2011年12月16日23時45分発行